

今月の表紙



ヤスダエンジニアリング(株)

世界に冠たる技術といわれる日本の推進技術は、一足飛びにその座を射止めたものではありません。先人たちが現場の課題を新たな技術開発によりひとつひとつ乗り越えてきたことで大きく進化発展してきたのです。

その発展には、整備のいき届いた掘進機をはじめとしたすべての機材を現場に送り出してくれるバックヤードの存在が大きかったことを忘れてはなりません。整備部門であるバックヤードはコストと見られていたこともありました。現場が小さな部品によるトラブルがなく施工完了することは全体コストの低減に繋がることを多くの企業が気づき、バックヤードに投資を始めました。それにより、適正利潤が確保されそれを原資に新たな技術開発を進めるという好循環をもたらしました。このバックヤードへの投資が世界に冠たる技術にまで進化発展した大きな要因のひとつだったといえます。

表紙の写真は、右上がヤスダエンジニアリング(株)上之郷工作所です。左上から(株)インテック上之郷工場における掘進機整備状況、その下がヤスダエンジニアリング(株)上之郷工作所の多段ジャッキ整備状況、続いて(株)インテックの社員(国内)です。下は右からヤスダエンジニアリング上之郷工作所のメンバー、中央がベトナム・ホーチンプロジェクトに従事した(株)インテックのベトナム人社員、右が(株)グローブの整備メンバーです。

このバックヤードの方々が推進技術を支えています。

(関連記事: 本文8ページ)



昭和62年(1987)6月に創刊された月刊推進技術は、土木分野でもニッチな推進技術を紹介する専門誌です。掲載される記事も新しい工法の技術的説明やその技術を駆使した施工現場の報文が主体でした。

本誌39年の歴史の中で、今や大口径管推進でのシェアが半分以上となった泥濃式の登場や、長距離、急曲線、巨礫対応、既設構造物到達型、地中障害物対応など、刃口式推進で直線短距離施工が常識であった時代からは想像もできないレベルに推進技術は向上し、世界でも通用する一流の技術と評価されるようになりました。しかし、この推進技術の進歩は各企業の技術担当者や現場の施工技術者、掘進機の製作設計者だけの努力で達成されたものではありません。元押ジャッキや作泥材ミキサや注入ポンプ、配管、ホース、電線やその接続カップリングなど細かい部品を丹念に整備して機能を十分に性能発揮できる状態で現場に送り届けることで、はじめて新しい技術が現場で成立できたのです。

本特集では、これまで登場機会のなかった整備部門にフォーカスし「推進技術を支えるバックヤード」と題した特集を企画しま

した。推進工事は掘進機やその他機器を回収し再整備して現場に再投入する業態です。

紹介する記事は、自社保有の機材を自社で整備している部門、整備を外注している場合の外注企業、現場から戻ってきた掘進機の整備や補強や改造を行う掘進機メーカー、精密機器で繊細な測量機の整備を担う測量機レンタル企業などです。また、水中到達など特殊な場面で登場する企業も紹介します。

本特集ではいわゆる裏方と呼ばれるバックヤードにフォーカスし、業務内容や整備に使用している設備、その業務に従事している方々、さらにその部門が抱える課題などを紹介いたします。

土木に限らず建設関連業界では担い手不足が喫緊の課題ですが、まさにこのバックヤードの担い手確保は推進技術の存亡に関わる大問題です。この問題の解決方法を見出すことは困難を極めますが、本特集が解決の糸口になればと思います。

本特集には、多くの企業から寄稿があり8月号だけで掲載ができないため、9月号も「推進技術を支えるバックヤード その2」としてお届けいたします。

(編集担当: 林 茂郎)

このたびの令和8年熊本地震にてお亡くなりになられた方々に謹んでお悔やみを申し上げますとともに、被災された方、そのご家族ならびに関係の皆様、心よりお見舞い申し上げます。

被災地ではいまだ余震が続き、不安な日々が続いていることと存じます。みなさまの安全と一日も早い復旧そして復興を心よりお祈り申し上げます。

月刊推進技術 編集委員会ならびに編集室